

春はよみがえる

小川未明

青空文庫

太陽たいようばかりは、人類じんるいのはじめから、いや、それどころか、地球ちきゅうのできたはじめから、光ひかりのとどくかぎり、あらゆるものを見みてきました。この町まちが火ひを浴あびて、焼やけ野原のほらと化かし、緑みどりの林はやしも、風かぜに吹ふかれた木立こだちも、すべて、あと形かたもなくなったのを知しっていました。

いつしか、そのときから、はや五、六年ねんたったのであります。「いま一度ど、起おき上あがる気きがあつたら、力ちからをためすがいい。」
 長い間ながあいだ、自然しぜんの栄枯盛衰えいこせいすいを見みてきた、偉大いだいな母ははである太陽たいようは、町まちの焼やけて焦土しょうどとなったその日ひから、下したを見下ろみおして、こ
 ういいました。

そして、風は建物の無惨な傷口をなで、雨は土の深手を静かに洗つたのです。そのうち、ところどころ新しい家が建ちはじめ、人々の手によつて、植えられた木立は、ふたたび林となりました。小さな庭にさえ、すすくとして、木が風にその小枝を吹かせたのです。

やがて、冬が去り、春になるうとして、気流は争いました。乱れる雲の間から、太陽は下界をのぞいて、たゆみなき人間の努力をながめながら、

「おお、いい町ができました。」と、ほほえみました。

すると、若木をゆする風が、

「昔も、あちらに、煙突があつて、いつも黒い煙が上がついて

た。」と、ささやきました。

雲くもや、風かぜばかりでなく、小鳥ことりたちも、前まえに遊あそんだのを思おもい出だしたのか、今朝けさ、めずらしくうぐいすが飛とんできて、いい声こえで鳴なきました。

「おや、うぐいすがきたよ。」

正しょうきち吉きちは、おどろきのあまり、この喜よろこびをだれとともに語かたろうかと、家うちから外そとへかけ出だしました。

この近ちかくに、一人ひとりの画が家が、住すんでいました。あの人ひとならきつと、いつしよに喜よろこんでくれるだろうと思おもいました。

「おじさん、うぐいすを聞ききましたか。」

正しょうきち吉きちは、へやへ入はいるなり、いいました。

「聞いたよ、君も聞いてどうだった。やはりうぐいすはいいね。戦後はじめてだろう。これでやっと、平和の春らしくなった。」と、画家は、窓を開けて、まぶしそうに青空を見上げ、はればれとした顔つきをしました。

「正ちゃんなんか、これからだ。ぼくみたいに年をとると、若いうちのよう旅へも出られないから、春がきて花でも見るより、ほかに楽しみはないが、うぐいすの声を聞いたときに、さすがに生きがいを感じたよ。また、花の咲くうちは、たびたびきてくれるだろう。」と、画家は、自然に対して、感謝したのでした。

正吉は、こうして、人間がことごとく平和を愛するなら、この世の中はどんなに楽しかろうと思いました。しかしこのとき、

彼かれには一抹まつの不安ふあんが、心こころにわき上あがったのです。また同時どうじに、ど
 うかそんなことが起おこらぬように、そして、おじさんも自分じぶんも、
 平和へいわな春はるが楽たのしまれるようにと、祈いのつたのでした。その平和へいわをか
 き乱みだしはしないかと、正しょう吉きちの気きにかかったのは、このごろ、
 この町まちへ越こしてきた青服あおふくの男おとこのことでした。どことなくきざに
 見える、その男おとこはサングラスをかけ、青地あおじの服ふくを着きて、毎まい日にち空
 気うき銃じゆうを持もち、この付近ふきんをぶらついでいました。
 さらに、事じじつ実あを上げると、先日せんじつのこと、男おとこは、かきの木きにと
 まった、すずめをねらっていました。この木きは火ひをまぬかれた老らう
 木ぼくで、枝えだを張はり、すずめなどのいい遊あそび場ばしよ所じよでした。だれでも、
 こうした光景こうけいを見みるなら、生せい物ぶつの命いのちのとうとさを知るしるものは、

神かみの救すくいを祈いのつたでありましょう。正しょうきち吉きちも、心こころのうちで、どうか弾たまのはずれるようにと願ねがっていました。しかし、精せい巧こうな機き械かいのほうが、よりその結けつ果かは確かく実じつでした。たぶん、子こすずめを助たすけたいばかりに、親おやすずめが身みがわりになつたらしく、いっしよに逃にげればよかつたものを、ただ一羽わだけ、じつとして、弾たまに当あつたのでした。

正しょうきち吉きちだけでなく、酒屋さかやの主しゅ人じんも、このありさまを見ていました。

「あれは、たしかに親おやすずめが、身みがわりになつたんだよ。かわいそうにな。」と、正しょうきち吉きちが青服あおふくにきこえるように、いうと、「どこが、かわいそうなんだ。そういうなら、牛ぎゆう肉にくも、魚さかなも、

食たべないかい。ばかをいつちや困こまるよ。」と、青服あおふくは、せせら
 笑わらいました。

赤あかい顔かおの酒屋さかやの主人しゅじんは、青服あおふくに近ちかよつて、

「旦那だんな、いい空気銃くうきじゆうですね。そこらのおもちやとちがつて、だ
 いいち鉄砲てつぽうがいいや。」といつて、ほめました。

青服あおふくは、銃じゆうがいいので当あたると、酒屋さかやの主人しゅじんがいつたど
 もとつたか、

「なに、おれは腕うでに自信じしんがあるんだよ。先せんだつても浜はまの射的屋しゃてきや
 で、旦那だんな、どうかごかんべんねがいますつて、あやまられたんだ
 ぜ。ねらつたが最後さいご、はずしつこないからな。」と、青服あおふくは自
 慢まんしました。それから、木きの下したへいつて、落おちたすずめをひろい

ました。さつきまで、仲間なかまとさえずりあつていた、哀れあわれな鳥とりは、もはや屍しかばねとなつて、かたく目を閉とじていました。

「やはり、今いまのものなら、日本製にっぽんせいでしょうね。」と、主人しゅじんが聞きくと、

「ちがう。戦争前せんそうまえのドイツ製せいさ。これなら、かもでも、きじでも、なんでも打うてるよ。こんどうずら打うちにいこうと思おもっている。」と、こう答こたえて、青服あおふくは、獲物えものをみつめるように、目めをかがやかせました。

「おもしろいでしょうね。」と、わざとらしく、酒屋さかやの主人しゅじんは、あいづちを打うちました。

「なによりも、殺せつ生しょうとかげごとが、大好きだいすだなんて、困こまった

性しょうぶん分ぶんさ。」と、青服あおふくは、自分じぶんをあざけりながら、他人たにんのいやがることを好このむのが、近代きんだい的てきと思おもいこみ、かえつて誇ほこりとす
るらしく見みえました。

「どれ、見みせてください。あんたの鉄砲てっぽうを。」

「おれんでない、家主やぬしのだよ。ただ打うつのがおもしろいので、食た
べやしないから、みんな鳥とりは借かり賃ちんにやっってしまうのさ。なんで、
あのけちんぼが、ただで、銃じゆうなんか貸かすもんか。」

「じゃ、鳥とりは、みんな家主やぬしさんに、やるんですね。」

「おとといだか、打うつたもずをやると、すずめより、大おおきいつて、
喜よろこんだよ。」

正吉しょうきちが、それを聞きいて、この男おとこは、禁きん鳥ちようでも打うつのか

と、おどろきました。彼かれが空気銃くうきじゆうを持って歩くあるかぎり、小鳥こどりたちにも、この町まちにも、平和へいわはないという気きがしました。

うぐいすの声こえを聞いて、画家ががをたずねてから、はや、二、三日にちたちました。いつも朝あさ起きる時じぶん分に鳴ないたのが、急きゆうにその声こえがしなくなりしました。正しょう吉きちは、なんとなく、不安ふあんを感じかんじたのです。

学がっこう校がっこうの休やすみを待まって、心こころの引ひかれるまま、うぐいすのきた方ほう角かくへ出でかけてみました。道みちばたの畑はたけには、梅うめの木きがあり、桜さくらの木きがあり、また松まつの若木わかぎがありました。戦せん後ごになつて、どこからか植木屋うえきやがここへ移い植よくしたものです。いろいろの下草したくさは、霜しもにやけて赤あかく色いろづいていたし、土つちは、黒くろくしめりをふくんでいました。

正 吉しょうきちは、まだ深くも探さがしてみないうちに、それは、真しんに偶ぐ然うぜんでした。ふと足あしもとを見ると、草くさのなかに落おちている、小鳥ことりの死骸しがいが目めにはいりました。はつと思おもつて、予期よきしたとおりだと、胸むねがどきどきしました。けれど、まだうぐいすと信しんじきれず、手てにとつて見みると、草色くさいろをした羽はねは、すでに生色せいしよくがなく、体からだはこわばっているが、うぐいすにちがいがいなかったので。おそらく、声こえがしなくなつた日に打うたれたので、ねこも気きがつかかなかつたとみえました。

正 吉しょうきちは、さつそく画が家かに知しらせました。そして、いいましました。

「たしかに、あの青あおい服ふくを着きた男おとこが、空くう気き銃じゆうで打うつたのです。」

「せっかく山やまから、林はやしをつたつてきたのを、思いやりのないことをしたものだな。」と、画家がは、うぐいすの死しを悲かなしみました。

「ほんとうに、悪いやつです。」と、正吉しょうきちは、いいました。

「どんな顔かおの男おとこだな。」と、画家がが、聞ききました。

正吉しょうきちは、自分じぶんの知しるだけのことを、くわしく話はなして、

「青服あおふくは、自分じぶんの口くちから、かけごとと殺せつ生しょうがなにより大好だいす

きだというのだから、やさしい顔かおはしていませんよ。酒屋さかやのおじ

さんが、あの男おとこは、べつに仕事しごともせず、競輪けいりんや、競馬けいばで、もう

けた金かねで、ぶらぶらして暮くらすんですって。そして、お体裁ていさいに

あんな日ひよけ眼鏡めがねをかけているのだった。」

「そうか、与太者よたものらしいな。まじめな人間にんげんなら、そんなふうを

しないし、殺生をなにより好きだななどといわぬだろう。いまごろ、はやりもしない空気銃を、どこから持ち出したものか。」と、画家は、不審に思いました。

「あすこの空き地へ二軒つづきの家が幾つも建つたでしょう。あすこにいますよ。銃は家主から借りて、自分は打つのがおもしろいので、鳥は家主にやるといいました。家主は、戦争中、竹の子生活をした人から、時計や、双眼鏡や、空気銃など安く買い取ったのだと、やはり酒屋のおじさんがいつていました。」と、正吉は語りました。

「あたりが、やつとおちついて、昔のような平和がきたと思つたら、いつのまにか、人間の心が変わってしまったて、信用どこ

ろか、なんだか危険きけんで、油断ゆだんができなくなつたよ。」と、画家ががは歎息たんそくしました。

「酒屋さかやさんは、ああいうのを、アプレゲールとか、いうので、いままでの日本人にっぽんじんとちがつているのだと、いつていましたよ。」
 「正しょうちゃん、見てみいてごらん、その男おとこは、きつとろくなことをしでかさなから。」と、画家ががは予言よげんしました。

それから後のちというもの、正しょう吉きちは、青服あおふくの男おとこが、子供こどもの目を打うちぬかないか、また、ガラス窓まどを破やぶつて人を傷ひとつけはしないかと、心配しんぱいしたのでした。

さむい風かぜが吹ふいて冬ふゆが逆さかもどりしたような日ひでありました。青あ服ふくは、屋根やねにとまっおまっているすずめをねらっていたが、パチリ！

と、引き金をひくと、たまが命^{めい}中^{ちゆう}して、すずめはもんどりに打^うつて、とよの中^{なか}へころげ込みました。どこで見^みていたか、ふいに黒^{くろ}ねこが飛^とび出^だして、すずめをさらつて逃^にげようとするのを、すばやく青^{あお}服^{ふく}は、そのねこをねらつて打^うちました。ねこは悲^ひ鳴^{めい}をあげ、屋^や根^ねをつたつて、姿^{すがた}を消^けしました。たぶんそのあとに、血^ちがたれたと思^{おも}います。これを見^みた青^{あお}服^{ふく}は、さも心^{こころ}地^ちよげに、「わつは、は、は。」と、声^{こゑ}をたてて笑^{わら}いました。「あのねこは、ペンキ屋^やのだよ。」と、見^みていた子^こ供^{ども}たちがいつていると、ペンキ屋^やから、顔^{かお}を真^まっ赤^かにして、若^{わか}者^{もの}がとび出^だしました。この家^{いえ}のせがれのかんしやく持^もちは、このあたりで知^しらぬものが、なかつたのです。

「どいつだ、うちのねこを打つたのは！」

「やい、てめえか。」と、いきなりせがれは、青服の手から空

うき銃をもぎ取りました。暴力と暴力のはたしあいだし

た。青服がなにかいいかけるのを聞かばこそ、台じりをさかさ

に銃を振り上げて、力いっぱい折れよとばかり地面にたたきつけ

ました。この一撃で、さしも精巧なドイツ製も、銃身がみ

にくく曲がつてしまいました。

正吉はあとで、この事件を聞いたのであるが、これがため、

青服は家主に銃を返されなくなつたので、弁償することに、

話がついたといいました。

ところが、それ以来、青服には、競輪も、競馬も、いつこ

うに運がむいてこず、金の工面に苦しみました。一方、家主からは、矢つぎばやに金をさいそくされたのであります。

ついに、青服夫婦は、この町にいたたまらなくなつて、ある晩、どこかへ、居所をくらましてしまいました。そして、だれの目にも、あばずれ女としか見えなかつた青服の若い女房は、ふだん唇を紅くぬつて断髪をちぢらしていたが、雲がくれる前のこと、

「わたしたちみたいなの、ばかはないよ。うちのひとが、鉄砲を打つのがうまいからつて、いやがるのをむりに打たし、とつた鳥はみんな取り上げておきながら、鉄砲がいたんだから、お金で、弁償せいと、どこにそんな強欲の家主さんがあろうか。ど

ちらがまちがつてゐるか、みんなに聞いてもらいたいもんだ。」
と、悪口わるぐちを世間せけんへいいふらしました。

これを聞いて、事情じじょうの知らぬ人たちは、金持かねもちや、家主やぬしにありそうなことだと、逃げ出だした青服あおふく夫婦ふうふへ、同情どうじょうしたかもしれません。

このような、おのれを弱じやくしや者と見せかけて、世間せけんを偽いつわろうとする、不正ふしじょう直者じきものが、このごろだんだん多おほくなったのでした。

正しやうきち吉きちは、これをにがにがしく思おもいました。ひつきよう恥はじを感じかんなくなつた人間にんげんは、自分じぶんというものがなくなつたので、どこまで、墮落だらくするものだらうかと考かんえました。

こうして町まちでは、人々ひとびとが、喜よろこんだり、悲かなしんだり、たがいに

争あらそつたりするうちに、いつしか春はるめいてきました。大空おおぞらで太陽たいようは、すべてを見みたけれど、干渉かんしょうしようとはしなかったのです。そして永えいきゆう久きゆうに、ただ愛あいと恵めぐみとしか知しらない、太陽たいようの光ひかりは、いつも、うららかなで、明あかるく、平和へいわで、善ぜんと美びに満みちていました。

ある日ひ、正しょうきち吉きちが画が家かを訪たずねると、もう、すべてのことを知しつていて、画が家かのほうから、
 「あの空くう気き銃じゆうを持もって、鳥とりを打うって歩あるいた男おとこは、どこかへいっ
 たという話はなしだね。」と、顔かおに明あかるい表ひょう情じゆうをただよわしながら、
 いいました。

「それに、おじさん、聞ききましたか、ペンキ屋やのせがれが怒おこって、

くうきじゆう
空気銃を地面へたたきつけてもう打てなくしてしまつたんですよ。」と、正吉は、告げたのです。画家は、そのことも、だれかに聞いたとみえて、知っていました。

「ああ、それでいいんだよ。そんなものさえなければ、持つものもないんだからね。」

なるほど、それで、ほんとうにいいのだと、正吉は思いました。こんどのもので、いちばん損をしたのは、高価な銃をなくし、世間からわるく思われた家主であろうと、考えたので、画家にそう話すと、

「いつも、自分だけ得をしようとする、家主の量見がちがつているから、銃を曲げられたのは、罰があつたのだよ。たとえ

なんと世間せけんからいわれても、平常へいじょうの心こころがけがよくないから、これもしかたがないのだ。なんにしろ、あぶない銃じゆうを打うつやつがいなくなつて、やつと安心あんしんしたよ。」と、画家ががは、さも、うれしそふでありました。

「すずめも、これから安心あんしんですな。もうあんな青服あおふくみたいな人間にんげんがこなければ、いいんだがなあ。」と、正吉しょうきちがいうと、

「もうこやしないから、安心あんしんしたまえ。そうわるいやつばかりでないだらう、君きみのようないい少年しょうねんもいるのだから。」と、画家ががは、正吉しょうきちをはげましました。

「ああ、春はるがきた。」といつて、二人ふたりは自然しぜんの偉大いだいなる力ちからを信しんぜず、いられませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学六年生 3巻11号」

1951（昭和26）年1月新年特別号

※表題は底本では、「春《はる》はよみがえる」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年2月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春はよみがえる

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>